

平成21年 5月31日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2006年～2008年
課題番号：18500680
研究課題名（和文） 保育における環境教育の実践実態と背景要因に関する調査研究
研究課題名（英文） A survey on environmental education at kindergartens and nursery schools
研究代表者 井上 美智子 (Michiko Inoue) 大阪大谷大学・教育福祉学部・教授 研究者番号 80269919

研究成果の概要：現職保育者(幼稚園教諭・保育士)対象研修における環境教育の実態調査・保育者の作成した指導計画や事例集等における環境教育的読み取りの有無の調査・環境教育として評価できる優れた実践を行う保育者へのインタビュー調査の3種を実施し、保育における環境教育の実践には、保育者の意識及び意図が最重要であること、保育者の意識を高めるためには現職者研修や研究事業の質が重要であることを明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	390,000	2,890,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：科学教育・教育工学・環境教育

キーワード：環境教育 保育者 幼児 保育

## 1. 研究開始当初の背景

幼児期の環境教育については、国外でも研究報告は少ない。しかし、実践はドイツやデンマークを中心に「森の幼稚園」が広まり、日本でも紹介されることが多くなった。スウェーデンの野外生活推進協会も自ら運営する野外保育園を中心に3～5歳児対象のプログラムを実施してきたが、それより低年齢の幼児対象のプログラムが新たに開発された。また、オーストラリアでも幼児期の環境教育に関するネットワークができるなど、関心が高まっている。環境教育先進国では保育の場における環境教育への関心が高まり、保育への導入の意義が認められて実践が蓄積されてきたといえよう。

国内の研究動向は、幼児期の環境教育を扱った文献は少なく、1990年代に比して増加傾向にはあるが、いまだ高い関心を持たれていない。実践面では民間を中心に森の幼稚園活動が広まっているが、環境教育が保育に普及するためには通常の幼稚園や保育園での活動に導入されなければ意味がない。そのためには、保育者(幼稚園教諭・保育士)が環境教育への理解を深め、実践に取り組まなければならない。

## 2. 研究の目的

## (1) 研究事業の実施実態把握

各保育現場は公的な指定園や自主的な取り組みとして様々な主題で実践研究に取り

組んでおり、これらには自然とのかかわりや食農教育、命とかかわる実践など環境教育につながるものが含まれている。園単位の実践研究は通常、園の紀要や報告書としてまとめられても、学会や学術誌等で発表されずに埋没していることが多い。そこで、これらの資料を掘り起こし、その内容分析を行うことで、環境教育につながる実践の実施実態と保育者によって環境教育という視点が意識化されているのかどうかの実態を明らかにする。

#### (2) 現職保育者研修の実施実態把握

保育者を対象とした幼稚園教諭・保育士の現職者研修において環境教育的内容が導入されているかどうかの実態を明らかにする。

#### (3) 保育者インタビューによる要因把握

環境教育と読み取れる優れた保育を实践する保育者にインタビューを行い、保育という同じ場にながら、幼児期の環境教育と呼べる実践に踏み出すに至った経緯や実践への考え方、また、保育者個人の生育歴や保育歴、保育観、自然観等を明らかにし、関係要因を把握する。

以上(1)～(3)の分析結果を元に、保育における環境教育普及につながる園内研究や保育者研修、及び保育者養成教育のあり方を具体的に検討・提言する。

### 3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、3種の研究を行った。

#### (1) 研究事業の実施実態調査

2007年11月に兵庫県の公立私立の全幼稚園741園を対象に、過去5年間(2003～2007年度)の研究事業に関する質問を7項目設定した質問紙(表1)を郵送し、271園から回収した(回収率36.6%)。

#### (2) 現職保育者研修の実態調査

兵庫県内の41市町村の教育委員会及び兵庫県私立幼稚園協会・神戸市私立幼稚園連盟の2団体の計43箇所、保育士研修については41市町村の児童福祉関係担当課の他、兵庫県社会福祉研修所・兵庫県保育協会・姫路市保育協会・神戸市私立保育園連盟・兵庫県保育士会の5団体の計46カ所を対象に、2007年2月に質問紙調査を実施し、2006年度に実施した保育者対象の研修事業、及び、研究指定事業の実施実態、②現職者に対する評価、③持続可能な開発のための教育(Education for Sustainable Development=ESD)の認知度の3項目群の質問を設定した。

#### (3) 保育者のインタビュー調査

幼児期の環境教育の実践として評価できる実践者8名を選択した。公立幼稚園園長1

名、私立幼稚園園長2名、私立幼稚園教諭2名、私立保育園園長1名、幼児にかかわる自然体験実践施設職員(元保育士)2名である。地域は、関東・甲信越・東海・近畿・中国にわたる。5名については、当日の保育、あるいは、業務を参加見学後にインタビューを実施し、他の3名はインタビューのみを実施した。インタビューは1対1で半構成的な方法で120～180分程度実施した。ICレコーダー2機で録音し、インタビュー後に文書に起こした。保育観察は、特に観点を定めずに行い、終了後、記録として起こした。

### 4. 研究成果

#### (1) 研究結果

##### ① 研究事業の実施実態

過去5年間に研究事業を実施したのは、公立幼稚園69.6%、私立幼稚園63.2%で、自然や環境を研究主題に取り入れた園は、公立幼稚園で研究事業実施園の46.9%、私立幼稚園で52.7%であった。

このうち資料提供が可能とした16園から、紀要や報告書等を入手した。「教育課程・指導計画」・「保育指導案」・「事例」の3形態の資料に示された自然とかかわる言説にみる保育者の着眼点を分析し、従来の子どもと自然とのかかわりの意義としての「科学性の芽ばえ」と「豊かな人間性の涵養」の他に、「環境教育的視点」として「自然～人～生活のつながり」と「生態学的自然観」が意識されているかどうかに着目し、それらの存在の有無をみた。

16種類の教育課程・指導計画において、従来型の視点である「科学性の芽ばえ」は93.8%に、「豊かな人間性の涵養」は81.3%に出現した。一方、環境教育的視点である「自然～人～生活のつながり」は56.3%、「生態学的自然観」は6.3%の出現率だった。

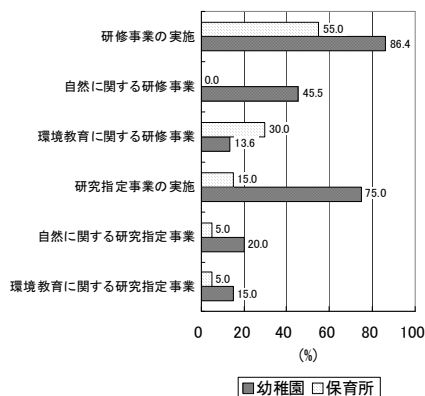
35種類の「保育指導案(日案)」には、まず、ねらい・内容では、従来型の視点である「科学性の芽ばえ」は34.3%に、「豊かな人間性の涵養」は31.4%に出現した。一方、環境教育的視点である「自然～人～生活のつながり」は22.9%、「生態学的自然観」は全く出現しなかった。次に、子どもの活動では、従来型の視点である「科学性の芽ばえ」は40.0%に、「豊かな人間性の涵養」は11.4%に出現した。しかし、環境教育的視点である「自然～人～生活のつながり」と「生態学的自然観」はいずれも出現しなかった。そして、保育者の援助では、従来型の視点である「科学性の芽ばえ」は40.0%に、「豊かな人間性の涵養」は22.9%に出現した。一方、環境教育的視点である「自然～人～生活のつながり」は2.9%に、「生態学的自然観」は8.6%の出現率であった。

自然とかかわる活動を含む事例60種類で

は、「科学性の芽ばえ」は 80.0%に、「豊かな人間性の涵養」は 28.3%に出現した。一方、環境教育的視点である「自然～人～生活のつながり」は 25.0%、「生態学的自然観」は 16.7%の出現率だった。

## ②現職保育者研修の実施実態(図1)

研修事業は、幼稚園教員対象にはよく企画実施されていたが(86.4%の自治体・団体が実施していると回答)、保育士対象の事業は少なく(実施割合が 55.0%)、自治体により実施回数に幅があった。企画回数は幼稚園教員研修で 0~66 回、保育士研修で 0~65 回と自治体により幅があり、規模の大きな自治体ではライフステージや職務に応じた研修がきめ細やかに実施されているようだが、すべての自治体での実施は困難なようで、研修の機会は所属する自治体によって格差があることがわかった。



※「実施あり」と回答した割合

図1 現職者研修や研究指定事業の実施の有無

内容は、幼稚園教員対象研修では、自然に関する内容は 45.5%の回答自治体・団体に実施されていたが、環境教育に関する内容を実施していたのは 13.6%であった。保育士研修では、自然に関する内容はまったく実施されておらず、一方、環境教育に関する内容は回答自治体・団体の 30.0%が実施していた。

研究指定事業については、幼稚園対象では 75.0%が実施しているとしたが、保育所対象は 15.0%にすぎなかった。幼稚園対象の研究事業の主題については、自然に関するものは 20.0%の回答自治体・団体にあげられたが、環境教育に関するものは 15.0%であった。保育士研修では、自然に関するもの・環境教育に関するもの共に回答自治体・団体の 5.0%であった。

研修担当部署の回答者からみた場合の現職保育者の自然に関する知識は 4 割を超える回答者が高いと判断したが、保育の実践力に

対する評価は幼稚園・保育所とも 10%ほど評価が低くなった。環境教育に対する関心や理解度は、自然に関する知識よりやや高い評価を得た。研修を実施するにあたって主題として選択する優先順位については、いずれも半数近くが高いという回答を選択した。幼保で大きな差は認められなかったが、環境教育に関する項目は保育所についての回答の方がやや高い傾向にあった。

「持続可能な開発のための教育(ESD)」について知っているかどうか尋ねると、幼稚園教員研修担当部署の回答者の 81.8%が、保育士研修担当部署の回答者の 75.0%が「全く知らない」または「ほとんど知らない」と答え、「持続可能な開発のための教育の 10 年(DES20)」については、前者は 90.9%が、後者は 85.0%が「知らなかった」と回答した。

## ③保育者インタビュー調査

経歴は対象者によって様々である。子どもの頃から保育者を目指していたのは 1 名だけであった。保育者になるための幼稚園教諭免許や保育士資格を取得するという点で、高等教育機関への進学が一つの転機点になると考えられたが、その時点で明確に保育者を目指していたのは 2 名だけであった。8 名中半数の 4 名が、宗教を尊ぶ家庭の出身である。子どもの頃に自然豊かな地域に住んでいたというより、ごく平均的な地方都市や田園地帯の住宅地で育っているが、ほとんどの対象者は子ども時代に外でよく遊んだとしている。10 代は誰もが友人・部活動・社会・文化に目が向く青春時代を過ごしており、10 代には自然への関心が低下するといわれるが、その通りの道筋をたどっている。

現在は、自然とかかわることを重視した保育に価値を感じている対象者たちだが、始めからそうだったわけではない。どこかにその転換点があった。始めから自然が好きで、自然に価値を感じ、そのために保育者になったり、あるいは、それゆえに保育の中で自然の占有度が高かったというような対象者はいないのである。そして、養成教育の影響を語ったのは 1 名だけで、養成教育は単なる通過点にすぎないかのようであった。養成教育の影響力は、その意味では個別な経験の集積はなく、保育とは何かという総合的なとらえ方を育てるとい程度なのかもしれない。ただし、対象者たちのうち 3 名が学生時代の自然体験活動について語っている。形こそ異なるが、何らかの形でキャンプ活動をボランティアに経験していた。そこでは、自然への関心が深まったというより、自然の中で体験を蓄積する子どもの姿に目を開かされるという役割が大きいようで、これらの 3 名は、20 代から 30 代と、年齢的に若い 3 名であった。自分たちの保育を考える際に自然をキーワ

ードとして取り込んでいった過程に、それらの自然体験活動への参加が影響しているのは確かなようである。養成教育において、自然体験活動の価値を伝えるには、自然に関する知識や自然遊びのような技能よりも、子どもの姿が見えるようなインターンシップ活動の方がより有効である可能性がある。

実践している、あるいは、重視したいと考えている保育のスタイルは、どの保育者も子どもが主体的に遊ぶ時間を確保する保育である。共通点として、子どもの必要感に応じていない内容を含む強制的・設定的な活動はしていないという点である。ただし、そのように共通するところもある一方で、何を大切にしているのかの重点が少しずつ違う。

自然とのかかわりのどこを評価しているかについて、共通していえるのは、子どもの育ちへの意義である。自然とのかかわりは子どもに多様な体験を提供するという点である。しかし、その表現は保育者によって異なる。ある保育者は、自然要素の多様性が遊びに多様性をもたらすと考えている。別の保育者は表現の豊かさに関係しているという。さらに、自然という場の許容量を語る保育者もいる。保育室内よりも自然地で遊ぶ方が、子どもも大人も心理的にゆったりとしている。トラブルも少なく、また、それを受け止める周りの子どもや大人の向かい方が何となく異なるという。

自然とのかかわる活動を実践している保育者たちであるが、環境教育という表現を前面に打ち出している保育者は1名だけである。私立園であるが、環境教育という表現を使いながら、園の独自性を打ち出そうとしている。他の保育者たちは、環境教育という概念への思い入れは強くはなく、その強さは人によって異なる。自然とのかかわりの価値を評価しながらも、環境教育の観点はどうかというと、個々に違いがある。

対象者の中に、スウェーデンの幼児対象の自然体験プログラムであるムッレ教室の経験者が2名含まれている。この2人の環境教育のとらえ方はやや異なる印象がある。1人にとっては、自然の中の遊びもプログラムもすべてよい「保育」をするためのものである。しかし、もう1人にとっては、ムッレ教室にみられる自然とのかかわり方は今まで自分たちが実践してきた保育とは異なるもので、自然とのかかわり方を幼いときから伝えるという意味で別の目的があるものにとらえている。どちらも子どもの育ちを大切にするという点では同じであり、様々な自然体験プログラムがある中、ムッレ教室が幼児期の5才児という年齢の特性を生かしたプログラムであることを評価している。しかし、前者がそのプログラムの目的への関心を語らないのと反対に、後者は幼児期にあのプログラ

ムを体験することで、日頃の自然とのかかわり方や見方が確実に変わるとする。つまり、その子どもの育ちについての着眼点が異なるのである。

#### ④提言

本課題が明らかにした以上の結果から、保育における環境教育普及につながる園内研究や保育者研修、及び保育者養成教育のあり方を検討する。

[環境教育を主題にした実践研究の実施]

保育所が幼稚園に比べて研修の機会や研究事業の機会が少ないことは問題ではあるが、それは本課題には直接関係しないので、ここでは、幼保を問わずに検討する。まず、園内研究や保育者研修のいずれにおいても、自然とのかかわりについて取りあげられても環境教育は取りあげられず、自然とのかかわりを取りあげても環境教育的な読み取りはほとんどされていないという結果から、自然とのかかわりに環境教育的な読み取りをするような内容の研修を企画したり、専門家が研究事業の際にそのような助言をしていくことが求められる。いずれにしても、環境教育とは何かと保育とは何かの両側面を理解した専門家によるかかわりが必要である。保育者自身は自然とのかかわりに対し、実際の具体的な実践に際して言語化する場合とは異なり、思いとしては多様な願いを持っているので、環境教育的な観点を導入しても、それを具体化する方法さえ示されればその理解は容易に進むことが予想される。

[養成教育の質の向上]

保育者のインタビュー分析からは、幼少期の戸外の遊び体験が、重要な背景要因になっていた。10代の経験は多様であり、特に自然にかかわっていた者はいなかったことから、よく言われる幼児期から小学校低学年期の原体験の重要性が確認できた。幼少期の戸外遊びは1970年代を境に減少しているとされるので、幼稚園・保育所・小学校などのフォーマルな教育の場で世代に共通した経験として自然体験を豊富にしておく必要がある。また、必ずしも保育者を目指していなかった層が厚かったことから、広い視野を持つことが保育の質を豊かにしていることが伺えた。養成教育としては、専門性にかかわる教育の重視の方向に改革が進んでいるが、そうした改革の裏にある、視野を広げるための教育の軽視の問題性が指摘できる。

養成教育はどの保育者にとっても深い印象を残しておらず、保育者を目指す時期に、キャンプリダーとして自然の中で遊ぶ子どもと直接かかわった体験が役立っていることから、養成教育の現状での不十分さは大きな課題ではないのかもしれない。ただし、子どもと自然を結ぶ活動を具体的に体験す

ることは明らかに若い保育者たちに影響を与えており、養成教育の中でインターンシップなどの機会を利用してそうした経験をすることは有効である。

## (2) 成果の国内外における位置づけ・インパクト

幼児期の環境教育の普及のためには保育者の意識改革が必要だと指摘され続けてきた。しかし、現職保育者研修においてそれにつながる研修はあまり提供されていないことが明らかになった。

また、幼児期の環境教育は自然体験であると提案されることが多いが、保育者の研究事業の内容分析から、保育者が既に自然体験を重視していること・従来提案されてきたような「自然体験」「五感の重視」「自然物で遊ぶ」などは実践されていること、そして、そこに環境教育的視点は無いことを明らかにした。自然とのかかわりは評価されているが環境教育的観点に欠けることは、今までになかった指摘である。本結果により、環境教育の観点から見た場合の保育現場の実践の不十分さが明らかにでき、また、どの点が不十分であるのかを可視化して伝えることができる。

保育者のインタビュー調査からは、従来養成教育において、自然体験が重要だ・自然の知識提供が重要だとされてきたことの有効性に疑問が生じた。それよりは、従来見過ごされてきた一般教養科目において視野を広げることと、子どもが自然と遊ぶ姿をみる機会提供の有益性が指摘できた。

以上の点は、国内外の研究において今までに実証、及び、指摘されてこなかった点であり、今後の養成教育及び現職者研修の改革に役立つと考えられる。

## (3) 今後の展望

本課題の結果から、今後、明らかにしていく必要がある課題として浮かび上がったのは以下の点である。

### ① 養成教育の経験の影響

どのような養成教育が必要であるかは、既に提言としてよくなされている。しかし、養成教育の経験が現職者になって以降、どのように生かされていくのかについての調査研究は皆無である。保育者インタビューでは、養成教育の影響は語られなかったが、養成教育の中で自然とかわる意義についての理論的な内容や自然遊びの技術を具体的に学んだ経験自体がなかったのかもしれない、現職者が養成教育の経験をどう評価しているのかを今後明らかにすることで、養成教育の改善に役立たせることが可能であろう。

### ② 環境教育のとらえ方

本課題の結果から、保育者が環境教育をどうとらえるかが、環境教育の実践に重要な役

割を果たすことが明らかになった。すなわち、五感を使って自然体験をすることが環境教育だと考える保育者であれば、既に保育の中に環境教育はあるととらえることになる。しかし、環境教育視点を定めて実践を分析すると不十分さが浮かび上がった。また、自然とのかかわりをよく実践している保育者でも環境教育の観点からみると、子どもや自然への向かい方、自らの実践の評価の仕方について違いが生じている。これらのことから、幼児期の環境教育を実践するためには、自然体験はよいとするだけでなく、保育者に環境教育的視点を育てることが求められる。その具体的な方法の検討が今後の課題である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3件)

- (1) 井上美智子、自然とのかかわりの観点からみた現職保育者研修の実施実態、教育福祉研究、34:1-6、2008、査読なし。
- (2) 井上美智子、幼稚園における自然や環境を主題とした園内研究事業の実施状況と実施内容 —環境教育の視点からの分析—、大阪大谷大学紀要、43:54-71、2008、査読なし。
- (3) 井上美智子、自然とのかかわりと保育者の役割、八瀬野外保育センター紀要、32:7-13、2008、査読なし。

[学会発表] (計 2件)

- (1) 井上美智子・無藤隆、自然とのかかわりの意義 —保育者のとらえ方—、日本保育学会、2009年5月16日、千葉大学(第62回大会研究発表要旨集、P.94)。
- (2) 井上美智子、保育者研修における環境教育の実施実態、日本環境教育学会、2008年8月2日、学習院女子大学(第19回大会研究発表要旨集、P.233)。

[図書] (計 1件)

- (1) 井上美智子・神田浩行・無藤隆ほか、「むすんでみよう 自然～人～生活」、幼児と自然ネットワーク、PP.1-82、2009。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

井上 美智子 (Michiko Inoue)  
大阪大谷大学・教育福祉学部・教授  
研究者番号 80269919

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし